里見八犬傳 五輯 四

特4 イ壹
600
247

600
247

南總里見八犬傳第五輯巻之四

東都　曲亭主人編次

第四十五回

名刀を賣弄して道節怨を復せ
窮寇を追失なく助友敵を換ふ

却説樹下なる浮浪人い驚ぎる氣色もなく松枝十郎真弘よりも對て某ハ下總
○ちて　○さいきり　○ふらうにん　○まつえだ　○まひろ　○むかひ　○それ　○ありさま
なる千葉の福草村の浮浪人大出太郎といふものゝ父なりしが世を去りし母ハ明失て年來ハ
○おや　○ふくさ　○ふらうにん　○おほでたろう　○ちち　○よ　○さ　○とし　○ねんらい
ひとり親ひとり子ひとり形り寒家に孝艱業餌の料足さへ竭て世を送ること絶ハ殘るあ
○　○ひとり　○かたち　○こうかん　○ぎょう　○えさ　○つ　○よ　○ことわり　○たえ　○のこ
さへいとこの下口の大刀ゆゑん祖父より某迄既ハ三世の重宝なれば身やもかへでとも
○　○ゆゑ　○おほぢ　○すで　○さんせ　○ちやうほう　○みに
親の爲に惜むも要なし美價を以ば售んとまづ千葉殿ハ
○おや　○ため　○をしむ　○よう　○ぶか　○うる　○ちばどの
彼君眼豆のごとく真玉も石も均辨ぬ賤物ことゝて返されうかゝもおほ懲
○まくまい　○えだまめ　○まだま　○いし　○ひとしなべ　○ぶつ　○かへ　○こり
ハ御我の御所よ參てまく親の爲なる願事をゆゑあげんと欲ぎるハ人ハ紹介せれ
○こが　○ごしよ　○まゐ　○おや　○ため　○ねがひごと　○さき　○ひと　○しやうかい

なほ孫ハ左右人ハ疑ハく綽いよく整ハぞ再び望を失ひて又鎌倉へ起ちて山内の
管領家へ售らぞやと思ひ〜ハ彼御内も相識あれば誰とそ汲引せるあべ。
當下某ありしゆゑ世ハ千里の馬ありとは思もよくこれを知る伯樂かれば生涯田
畝ハ糞かの〜連城の璧ありとは思もよくこれを織る卞和かれば瓦礫と共ハ碌々
〜り今ハ企望の三諸侯いみる千乗の君ハ〜只下口の大刀を切織らべいぞ
賢と不肖を擇く挙用ハ〜ハ大約かく暗君ハ〜るがこの刀を售ぬもの。
扇谷ハ管領家ハ賢ハ親〜不能を愍〜寛ハと海のごとく容ハぞと
いふとなく篤ハを地ハ異ハぞ載ハべとは那當今無雙の名将ハ〜ぞ
世人ハをさく〜いふハ彼君ハ今上野ハ白井ハ在城ハ〜べ路の程ハ遠くとも
彼処へ〜ハこの名刀の價を倍して買せハん〜とく踵を旋らこそ跡を
慕ひつきのふこの地ハ来れども〜ハも相識絶てあれば〜入るまんがもあべ。

砥澤ハ山獵ハ〜ハ市中の風聞隠れあけるハ帰城の折を候ハく見参ハ
いハらぞやとて漫ハ虎威を犯〜ハ不敬の罪を宥られ〜これらのれ趣を〜ハ
〜ハあよハ犯ハのが幸ひハんと憚る所もなく答る辯舌流るハ水のごとく一癖
あべき面魂ハ〜ハ人骨ハとて嘆賞せぬ〜
ハり〜ハ中ハ真弘ハ〜ハハ果て舊の処へかへり来ハ則綽ハの趣を云
云と報ハ〜ハ定正ハ〜ハ領きて馬より下て道傍ハ芝上ハ氷几を立させく。
そのハ召といそぐ〜ハ真弘再び走り向ハく彼浪人を〜て来ハ〜その間ハ
定正ハ氷几ハ尻を懸ハ〜ハ近臣左右ハ警衛して齊整とて〜ハ〜ハ件の
浪人ハそが仮真弘ハ俱せ〜て間近く跪ハ〜を定正要時ハ〜ハ下總
千葉の浮浪人大出太郎ハ汝ハ〜ハ狩明失る母の為ハ家宝の大刀を售ハと欲
ハるその孝行賞ハべ〜その大刀何ハの德ありて予ハ售ハとそ自負〜ハ三世

家傳の由来を告よ大刀の銘を何とかふぞと問れて臆せず小膝を進めさゝ某が祖父ハ故管領家足利持氏に仕へしものなれば両公達ハ後ひまゐて嘉吉の結城合戦ハ陣歿して父ハ仕官を欲せず下總千葉ハ退隠して年四十ハ身おりうう年来浮浪ハ武器調度を沽却七ゆゑ一口の名刀ありこれハ是世ハ名〻所村雨の大刀ハ乃祖尊氏将軍より持氏卿まで相傳せしを春王殿ハ譲らせ給ひ〻ハ後嘉吉の戦ひ敗れて春王安王両公達ハ討れさせ給ひしゝ件の太刀ハ幸ひハ臣が家ハ秘置り某が父ハ彼公達の伽扈従ありれば結城の城を接れ日村雨を腰ハ佩く辛く屯を殺脱て千葉ハ僑居をとなよ〻父が自筆の古記録あり紛れあべからもいゝぞと〻ハ定正ハ頷かず現村雨の大刀のゆゑハ予も豫てより偽ゆゑ〻ハ名を竊む贋物をもて人を欺き利をしも揣る潟許人の世ハ往々ある習俗なるハ汝が父の遺書ハ認られ迹の

傳来録を誰ハ證据とするものあらんや別ハ證とハるハ〻と再問れて些も擬議せず御諚でハ必ども贋物をもて利を謀れるハ狡商人のうハわゝ高禄を欲せぬ不二世浪人の某ハ疑れまるハと打をゝ〻を〻抑この大刀ハ鋭とハ陸ハ象を砕くべく水ハ蛟龍を截とハ唐山の龍泉太阿我朝の小鳥蒔鳴鬼丸龍尾ハどゝ〻ハこの右ハ比べ〻ぞ加旃技放てバ刀尖ハ水氣流れく太山の石滑ハ異なるも振るハ村雨の梢を洗ハ似れバそ軈く村雨と命けれを語継ぎ〻ハ人ハ贈答せず鄙語ハ論ハ證据こハ贋物狀真物狀よく商せと誇ハ答も果ぜ含ハ大刀を取直し接放ちく晃〻ハ振ぜ不思議なるハ刀尖ハ潛然とく潰る水氣四方ハ散乱しく彼警衛の近臣等が面を撲く降伏げば衆皆袖を拂ひもあゝぞ遥ハ殿とぞ退くけるさぶ定正ハ林九を〻れぞ扇をもく避ハ水氣の

精好の袴の上に被りて結ぶ白露を見て只管感嘆の膝打鼓せば破落々々と
落て砕る名刀の奇特に疑ひ忽地解るその紐びは大かた枯ても声高に
宣ふ等雯時大出太郎かくまで正しき證あれば疑心は既に氷解せりその大刀これへ
とく〳〵せよといはせもあへず太郎は欣然と身を起さんとする程に松枝真弘推禁めてまて
不覚え大出生殺中途の見参えとも貴人に咫尺するに帯刀する事憚り
あり況白刃を引提て近つけまるよしあらんや大刀をまれらに遞与し逆とのみへども
聴かぜ頭をうち掉り原来和殿は某を疑しく思ひあぶ放人々まきを疑ふ
まれも亦人々を疑ひ思へざるにあらず乱れたる世の習俗として九貴視も賎視も莫の
中に刃を隠せ貪慾邪慳は量りがたし然るを今虚々と高貴人と近く心款
しく身もかえドと思ひし宝を左右人達に遞与して價も賜らで豪奪せられば
まれは孤獨の旅客なり斯夥なる人々と争ふとてもその甲斐なく大刀をも

徒さぜに可惜命を喪ひんことむづかし然るが舊らで後悔するそよあれ
といふを定正うち聞て十郎が當坐の遠慮は慎なる所以なれどもそは亦
人によるべきの大約六十六箇國亀甲の如く封疆を建て数國を領する
大諸侯東西も多かる中に予を良君と思ひて家宝の大刀を齎してき
たるなに推参せんやかつまた予はその村雨なる大刀の主を愛で時宜によらば
高禄もて召使んと思ふ大出太郎を今疑んは要なきことなりと聊も厭ひかでたゞく
とくみづからあるて許せ給ひしを鷹揚なる寛仁大度の主命に真弘忽地
閉口して逡巡するのみなれば大出太郎は欣然と刃を引提て身を起して走
らば御免を蒙るべしとて膝をつき定正の床几のほとりに衝と寄りて跪起て
件の大刀を進らするがとく胸前捉て仰さまに突倒し推伏て刀尖晃りと
さし著れば吐嗟と驚ぐ松枝十郎竈门三宝平妻有六郎その餘の近臣外

○山青堂藏
英泉画

様の諸士雑色奴隷列卒までもさそい癖者射て殪さん欲刺や弟と散動ども賈誼が所云蒐に投ずる器を忘むどくよ〜や癖者を討とるとも主君も倶に命を隕さばその甲斐なしと躊躇く握る拳の汗も只沸がごとくよ打擇にの時おとや定正が刀の鞘はずるをかけつも剛敵よ推伏られて終に刃を抜くとぬすび兵共拯へと叫ぶのこと又せんせべかりけを當下件の癖者ハ天地に響音けと声高く立て管領定正慥に聞き下總千葉の浮浪人大出太郎と名告ハ且く汝主後を計らんとその假の名を去歳の四月十五日江郷田池袋の戰ひに一族後類負を盡と故ず為に亡びぬ〜煉馬平左衛門尉倍盛朝臣の死黨よりのあり〜と知られる犬山監物貞知入道道策が獨児に乳名道松と呼れる犬山道節忠與とハ君父の讐を復さんとて薪に臥し膽を嘗て辛萬苦の宿望を今こそ果ん怨の刃受よやッと罵れば定正いよく驚怒て反復さんと為る処を起しも立ず髻を左に

楚と引著て細頸丁と搔切こう松枝寵門妻有の黨敵の後類皆こうもそ吐嗟と驚ぐ大叫喚もよりも遠慮のもを下さで遺恨に堪ひず今さらに備を立ず遑もあらばこそ。

撃ん弟と刀尖を技列ひ内して八方より競ひ蒐ん道節ハ左に引提〜讐敵の首級を投捨てと嘯て縱横無礙に殺靡ける必死の大刀風雨欺乎欺名刀の奇特に土を潤しる道のめるに敵の雑兵を獲こうと撲地と砕る修煉のもちち瞬間に血い涙鹿の野に満て撃ぬるめぞ見えられる一人當千の向に前に勇士の働記壁言ば餓虎もて群羊を駈るごとく唯是一個の道節に駄の士卒辟易て大い足場の悪かるぞ且退けと罵りつ潰と乱て逃迷に雑兵を誘引れる松枝寵門妻有の諸士心ぞりハ早れども大厦の倒れんとるとなに一木いぐ〜これを拄ん皆共侶に逸足を踏乱て逃走るを蓬〜返せと呼被る道節を刀尖より留る水氣をうち振ぎり一町あまり追に程に一叢繁茂薮蔭より。

関を咄と作して顕れ出る一個の若武者これ怎麼なる打扮ぞ但見れば素絹の皂絲
の直垂の花を処々に縫箔をする狩装束の萌葱威の身甲して精好の奴袴の
亀甲紋なる肱甲臑鎧を透間もなく具足ゐつ腰に二尺五六寸なる金作の大刀に
海豹の尻鞘被く九寸五分なる短刀を横佩左に重藤の弓の握太なるを挾
て鷲羽の征箭両條を把そえたるその隊の兵三十餘人おの〳〵短鎗の刃頭を
揃へて道節が前後左右を弁々と捕繞つて復武者音をぞ揚げたる当下
件の若武者は弓杖突く声高やかに愚なる犬山道節良将にあらず時運に
稱へる神助あり管領いかでか汝ぞ孤客に撃れんやと謬れる汝が為に
命を隕せ〜假管領は只是當家の勇臣なる越杉駅一郎遠安と呼れし
の去年池袋の捷軍に汝が主君倍盛の頸捕れて名誉の感状を賜る
剛者なりけれども汝が年のいまだ弱きを侮りて何容々〳〵と

撃れは不思議の僥倖なんかなるを誰とか為る管領補佐の一老職武術
文学敷嶋の道にも暗からぬその名は都鄙に高かりける巨田左衛門大夫持資
入道道寛の長男なる新六郎助友が父の奇計を受て汝を謀りしとぞ
ざるべし。父道寛豫てより豊嶋煉馬の残黨の隙を窺ひ奸あらんと
をきく遠謀ありしを去歳の秋より彼此へ士卒をもて遣して竊に拐引向せ
下野武蔵の間に優婆塞に姿を変つて左道をなして愚民を迷し銭を集め
軍陣の便に充る汝が影迹既に顕れて捕吏に捕られ幻術あるとも火炙の
油断の体なるそ赤てさらに誑惑とぞ管領は近日より白井に在城なるを
知らでか徇知して鎌倉を出ぬ近臣越杉が面影のよく主君に似るを
駅一郎に大将の狩装束を賜りつきの五日の早旦より砥澤の山の狩倉に彼建
久のむかしを偲ぶ汝を釣ん為なりし父の先見果して違はず今招ぎも網に入る汝が命

運を弾き討捕るハいと易けれども敵あぐる可情し勇士と見がるが
箭に被ぎ及びあぬ身の力を量りく非を悔ひ時の務を知らば降参せよとぞ
呼ばる道節ハ謀ふかりとも思ひ敵に計らるとく怒る面に朱を注ぐまで疾視
詰る必死の覚期に大刀とり直して些も撓まぬ扶ハ助友ぞ耳穢ハ降
参呼り九世を易るとも讐の奴とされやハかん今定正を討得ぞともるぞ先君ハ
鎗を鍋ふ越杉もあり主の仇ぞひの随に斃に苗れば聊亡君尊灵を慰ぬ
よ[illegible]ぬ恨らくも父の讐竈門三室平五行を斃ぬ[illegible]然とて
名も無ぬ雑兵を幾百人殺さんより汝とされと勝負を決せん助友進めと刃を抗て
頻りに招く不敵の廣言憎さも悪しと捕ぬの兵ヤツと被る諸声と共に齊一揮
閃ぬ鎗を前後に飛越反踰右に受ぬ左に流せば煉の刀尖丁々砕石と
疾風に枝を折るごく鎗の蛭巻幾條欠砕落されく逃るもあり或ハ真額乾竹割

或ハ胴創霄車矢庭に命を隕せるもの十人ばかりあり遂に痛手を負ぬ
者忽地倒と閑死靡けば道節得たりと[illegible]
つるんと[illegible]程に助友駿ぞ弓に箭刻めく能弯固めく漂と射る矢声と共に
道節ハ身を流してぞ避ぬる程もあらせず射出せ二の箭を天刀もて丁と切
拂ふ神出鬼没の疾働に助友ハ心瞬く弓を捨て大力を振ふ
程に松枝妻有の近臣ぞ時分を揃へく返し来る助友に力を勇て被撃苗
よと下知さればその隊の兵数十人推隔とり囲く微塵にされとぞ揉ぬる
當下道節ぞ[illegible]思慮の足らぬく敵の謀に當られ[illegible]先君の讐
敵真の定正ぞ[illegible]加旃父の讐言竈門三室平五行もこの隊にあるぞと
[illegible]ぞ漫に進く戦殺せば世の朝慮ぞ[illegible]大宿望を遂んの限りと
翌[illegible]や幸中に黄昏ぬ只一方を殺開く身を全して時を俟んあるく

山青堂蔵

死をとゝと尋思の腑を固めるる奮戦突戦初より精神まさく加りて支勢ぞ
中へ寄て入る迅と恰飈の如くそも一條の血路を開かく旦戦ひ旦走るべ助支頻ホ
焦燥く士卒を詈り奬て真弘之通共侶は何処まぞと追ふ方々浩処は
信乃荘助現八小文吾ホの四犬士ハ曩は明巍の山中ゆく荘助が遠眼鏡を
ゑうりといふ武士をいとあつらくやふ形んに倘あゝとのあんうとゝ山を下りん
彼此と尋索くその曛昏は白井の城へ遠うぬ一村落を過る程は里の老
弱罵駡ぞく今如此くこの松原わく管領撃れゆひよろう寇ハ一個の浪人老
煉馬の残黨あるものゞとゝへばいあく管領のいぞう撃れゆゝ彼癖者は殺
されゝハ去歳の軍は名を揚うゝ御内の越杉といふ人ぞとゝよそとあれかくも
あゝと癖者ハ術煉ゝ単身わく瞬間は死人で山を築ゝとゝいふ逃てゆく
村は走りも入らゞいふゝと禦ぐべ死門戸をとく鎖せ女子ども喧嘩の側杖打

る孔と呼ぶ音声言語く皆東西へ奔走ゆ騒劇大ゝるゝれゝば四犬士もうち
驚ぞく原来此ゝうりわく復讐の本意を遂ゝハ彼犬山ゆぞあんぞうんとく
その処へ到ゆゝいぞう虚実をゝるゝ一ゆんや暮ぬ間ゆと共促ゆ歩の運びをいそ
ぐゝ里遠離る晩間前面を透ゝ長視れゝ年尚ゝ死一個の武士ゝふ白刃を
うも振く追来る敵を物ともせゞ敵近ゝけゝゝ返ゝて殺靡け撃退けて
戦ゝと両三度道のゆくての四犬士の間は忽地衝と入りく背は立ゝとゝれゝば往方も
ゝゞゝりゝゝそのとゝ死巨田助支ホハ士卒を頻は駈立て透間もなく追蒐来前面
立在む四犬士を是も道節を助大刀の同類ゝりとゝひゝん彼撃笛吉と下知ゝれゝば
多勢を頼む捕ゆの雑兵咄と嘩く衝出を鎗の刃頭ハタ立雨の電光めも異
ゝゞ四犬士ハあゝそもいふと驚避ても一言の問答は暇あゝれゝば已とをゝ腰刀を
接合ゝく戦ひゝうさゆ程は雑兵ホハ只獨あゝ道節ぞゆ撃笛ざゝるは替る

敵ふい四大士あり譬バ山の幸雄ホゴ一虎を追走らゝ百獅子ヨ逆ふが如く忽地ホ殺崩されゝ一町あまり退却を助友ハ守返して逃る士卒を罵激ゝ短鎗を閃ゝく四大士ホうち逆へバ松枝真弘妻有之道恥を知り名を惜む武士ハ死力もあらざれバ又助友を相援けゝ刀尖より火出るおでホ嘗嘖て攻ゝるる。浩処ヨ城中より援の兵百騎許汗馬ヨ鞭ち宙を飛して走ゝる近つく程てあれ射方を勇る周の声ヨ逃ゝる士卒も声を合して皆共侶ヨ競ゝて蒐まバ新隊ハ備を引ゝけゝ横鎗をぞ執ゝるこの時既ヨ日ハ暮ゝ影ハ細月六日の月も朦ゝ立雲ヨ隠さゝつ又顕ゝ明間不定の叢を篭盾ヨ四大士ハ一進一退力を勠して苦戦ヨ大刀の鋼鉄績ゝ彫のごとくあるまでも浅痍一个所負ふもなく千変萬化の秘術を盡して頻ヨ捷ヨ乗るものゝ不知紫内の夜戦あり緯ハ素より不意ヨ起りて。これヨ援の兵あれバ敵も蒐隔られゝ逃ホ拯ふとを防ぎ信乃

荘助ハ城兵の新隊の中ヨより圍れ又現ハ小文吾ハ助友が隊兵と戦ひあぐく暇なく四士四所ヨ別れても危窮ハおのゝ九死一生阮難あるホ三ゝびホ及べハ存亡ハ知ゝざるゝ。寡を以て衆ヨ敵ふるを己とを防ぎ防ぐ内ゝ四大士萬夫の勇あり敵ヨ一介ハ有斯一程ヨ道節ハ辛ゝく大敵を殺脱ゝ走るとも三四町既ホその日ハ暮ヨ及り追来る敵のあるゝ路傍の樹下あり石ホ尻をうち掛ゝ且ゝ息を吻ゝ折ゝ忽地後方ホ聞の声して撃大刀音さへ聴ゝ。道節耳を傾けて原来敵ゝ来つる跡ヨ烈し死戦ひあるホて響ヨ聞れ頻ホ慕ふ敵兵を砍拂ひゝ走り一時前面より来つる旅客ホが間ヨ入りて立紛れバ輙く敵ホ遠離らんや折しも黄昏あり敵ハ四箇の旅客をぞ助大刀のものぞとあらゝく捕籠ゝ難あるあんゝ。あらゝバいふゝく戦ひあぐ死彼旅客ホが来つる故ホ。れハ輙く追ふを脱れ脱れ旅客ホハ敵ヨ撃るるあらバ便是人を殺して

るゞ命を保るゝ勇士のせぎる所ゆゑ恥かくれなり甚しへ。いそゝ彼処へ走る
還りて旅客ホを拯ひん拯ひなゞともその人々と共侶ホ死ぬゞ生るゝ勝ると叶ふ形り
と肚裏に思ひ決めく遠しく綫ゝ帯を引締ひく賞を褒げて驀直ぐ舊の
処へ還りてゝれば果して四箇の旅客ホい城兵ぐ捕圍れて既ぐ戦ひ疲労ゝその
危殆をいふべくゝ賸城中より加勢の武士百騎許ゞ来れりとあゞしくく騒ぎ始ホ
弥増れば道節愛時尋思をゝつ。とりゝれば敵の捨ゝる弓箭処々ぐ多くあり又
紙ゝる列卒縄も有ゝり是究竟と心手あるゝ弓を据り箭を撓りて索ぐ編ぎ
左側ある大竹籔ホ潜入りて敵の後ぐ近つくゝを待ゝ絶ぐあるゝりかくく又
道節い幾尋ゝ程件の索を彼此の竹ぐかゝりて引動ゝ忽地ホ関の声を揚ゝ
ゞ城兵これぐ驚きれくゝゝもいかゝとゝる処を竹籔の中ゝりて射出せ強音空
箭いゝく矢庭ホ命を隕せゝ。五七人ぐ及びぐゝれば城兵悚ゝ駭ぎ立く原来敵ぐ

伏兵あり一圓ゝを退ぞゝと罵る程ホ道節い索を引くい竹を動ゝ箭を射出せい索を
引ゝく暗さい鳥ゝ籔中ぐ籠るる敵の多くくんと思ひ惑る城兵ホいよく周章くを
父道寛の軍術を見馴聞熟ゝる助友も終ぐ悚ゝぞ皆共侶ぐ人辟撲ゝ崩れホ
ゝれば信乃荘助現ハ小文吾ホの四犬士い忽地ゝ勢ひホ乗ゝ敵を
ぐ程ぐ追捨ゝくゝ迹を躡ゝつ荒芽山の方へ走りゝり城兵ホいひけく
敗走りて息つゝ思ひ白井の城へ逃籠らんとく頻ぐ打擇ゝゝりゝば助友怒て
声高ゝやうホ蓬矢兵共の逃足ゝ計ゝるホ敵い煉馬の残黨ぐや伏兵あるべく
怕ゝるホ足るゝゝ籔中へい箭を射被け鎗を突入れて駈出せぐ逃ゝる奴をば
とく追蒐ぐ只一人ぐ撃留ぞゝ後日の咎を脱れゝるゝいふひゝと敦圍く
烈ゝく下知を傳れば城兵これぐ賛ゝ籔の邊へ入ゝ走ゝ且箭を射被け鎗を
入れ果い端ゝ揺分ゝく衆皆捜索ゝるぐ敵いむとゝも在らぞゝと賊方の送せゝ列卒

縄を彼此の竹に結びて措て原来熟く謀られうず遠くに遁げ追蒐ねと再び罵
駡ぐ時移りて往方を知らぬに呆れて進む擬勢も非力助友は後度の不
覚に安らぐ窮寇は追ふべからず「圓白井へ退かば便点をもつて送る
捕ふるをよろこばれと強ても追せず竊に家隷両三人に謀を授け勇
真弘之道共侶は全隊の士卒をひそかに白井の城へ還りぬ宵は
甲夜過ぎて寂寥たる人跡絶たる列幹の松の背は蒼田に風渡る土堤の茅萱に
置く露を伸と聚く虫の声高くも澄る夕月夜影さへ薄ぬ単衣の裾を脛
に端折て腰に帯たる両刀の外に一刀挿添たるいとも怪しき一個の武士稲塚の蔭
よりしく四下をうかがひ見てうち忽然と立出る是はこれ別人にあらず犬山道節
忠與なり既に竹藪の奇計をもて駿の敵を退けて輙く四箇の旅客を拯ひぬれば
いよいよ駭れくもあるも件の藪に在らぬ近ぬるそこに身を潜して豫て時分を揃りん

助友ぬが全隊を率て白井の城へ還りぬを遣過して目送りて再び顕れ出る
なり當下犬山道節は彼此に横り臥せる敵の死骸を曲々にとりかう
へて曩に投捨たる越杉駄二郎遠安が首級をやをらとり揚て月を燭に又
よくよくたる怨の外背凄く愛時覘くるも領ぬ天運いまだ全からずや管領定正
ぞと見るに繁しいその臣遠安なれども這奴も先君倍盛朝臣に鎗を鍋たる怨敵
なり彼深野の恥を雪ぬ睚眦の怨を復せ皆是志士の本意なれば打落したる
仇人の首級を捨て走らば大敵を怕れたりと入いん些少れども今宵の家裏
なれば先君を祭の胙これは優せめあべしやとおもうぞ死骸の袖をうちぬく
散落離と裂とうく件の首級を推包む心のどけくその端を帯に融と結附るを
後方に立くたるめのあるぞもあるぞと道節は叫ぶ藪蚊を拂ふ去らんとする
程に癖者等と呼留く晃りと衝出た鎗の刃頭にあらねうと道節は片足代に

あちこちと身を跳しく信とんとり此度の歓は一人狩百騎よりあり城兵どもみな逃
足は速しく小汝一人かへ来て虎髯を拉るは殊勝なり名告れやんといはせも果ず
鎗を繁扱く声をあり立道節さの廣言をかれは初度の戦ひは早まを肘
疵を負やそれば又功名を貪らぬ汝を捕るの駈駐は朋輩に譲る彼処に
樹蔭に退かく心ぬ時を移しうかして空しく城中へ還らんとの本意なさ
ひとり汝が往方を索ねく目今迹を認めうまが名は音なやつん去歳の四月の
戦ひは汝が父道策と組で當坐に首を獲る竈門三宝平五行と親子さん
そがるはは過世あるべき武士の名聞首をとられと罵る道節は願ふ敵ぞと
疾視詰く声高やふ原来汝が五行はその名は豫く笑しぬど面も楚と認めば
撃偏せしふ居残りく出く名告るは天の賜まが武運にを憑しれ要時も忘
れぬ父の仇其処を退かとと敦圉く刀を晃すと技放せば三宝平も亦ありえある

武藝に誇く些も撓まぬ逆ふ烈しく声を合しく衝出を鎗撃大刀の音も
隙あれ生死の際一上一下と術を盡しく要時は挑戦へども忠孝無二の道節が
獅子奮迅の怒めく頻りに進む陽の天刀を終ゆを陰に閃く鎗を蔓
哩と巻落されく大刀を技んとする処を大喝一声道節がうち閃く刀は
下に三宝平が身を轉しく足空さ踏ふ倒れる軀のうへを飛越えし首を
遥あやく飛る松ふ當りて落てうさる程ふ道節は父の讐を受ひの隨に撃
果しうれば欣び比んに物もなく刀を斂めく樹下なる仇人の首を引提まう
又その死骸の袖を断離く包みて腰ゆに著うるう浩処ふ助友が曩おこらへ
笛置く両三人の家隷はものく鳥銃携く東西の樹下より寵より矢比を揃へ
火蓋を鑽らんとする程に道節目をやく透しうんく左右に掴む小石の飛礫に西
なるひとりは頭を打破られく叫びもあへぬ。仰さまふ倒れうる又東なる一人は鳥銃を

四大士再
厄白井の城
矢上戦ふ
卜文吾
壮助
現八
黄門三平
英泉画

犬山道節
下ふ父の
月

打落されて驚騰く取らんとするを取らもやで道節は鶴鳥の如く疾近つきて足を飛して礫と蹋る爪頭尖く吭を衝くに撲打られる灸所あれば声も出で足を張く仰反り程もあせで又一人弓は箭刻みて樹間より出るを道節速く送る鳥銃取るより先く火蓋を鑽て撞と放せば郷音と共に樹下なる彼一人も倒れたり三人が外は今かも敵はあじと道節は鳥銃を投棄て袖を拂ひて悠々と高峯の方へ還りゆく宿を何処とまぐもらねども後あも主を思ひ親を忘れぬ犬山は尾張のくに上野の白井の城の城将士卒もその里人も後の世まで語継ぎ伝へて道節まつとはいと頻泣児も立地は声を軽て怕れぞ。

三國の時張遼が武名は小児を懼たる遼来ぞよりも目覚ぬ名を海内に揚げけり。

第四十六回

地蔵堂は荘助道叡を爭ふ
山脚村は音音舊夫を拒む

再説信乃荘助現八小文吾は四犬士は共に白井なる城兵に捕圍れて苦戦は時の移るまで久しくは死を究めしは誰か圖らん竹叢の中より関を作て箭を射出して彼を助るものありれば城兵これは辟易して鐵壁よりも堅かりける重圍忽地釋るまで夜は紛れ迹を埋めて同意異途に走りつ。あくまで九死を出て一生を獲こうけるそは中は犬川荘助義任いぬる日庚申塚なる法場なる三犬士は死を拯れ恩義を忘れず答んとはひれが進むは三士は先きに防戦ひ退くとは慶しく殊さらに後れしは終は信乃は往方を求ぶ。

てを又霽月は影いと細き嫦娥の姿は便あれ宵あれども。いひ合るものあれば何処を投く彼人を追著んあるぬを猜平は信乃は誂とは書状のうを見せ。

あつかも心あるは荒芽山の方へそ其処ともあらぬ間道捷径は信して走る程に今は二三千町なるんとは物。その出羽は著ば郷は目はあり。

大歇と戦疲労るうへは不知案内の夜行をおとろ頻て走りかければいとゝ
餓るふ喉さへ渇かく堪がたく堪がたくありさま甚此邊い邊ども世けども荒々る郊原ゆゝく
憩んと思ふる家も形しとられば右側ある茂林の中よ火光隠々とんそしかゞやく
栖ば住む人ありけを縱一碗の飯を獲ばとも敲かく水を乞むやとて進み入るに
一町許件の茂林よりあらくるる人の家あれば最老る樹下小徧小形
地藏堂あり彼処で人くる火の光とこの佛へまゐらせる燈明の洩るるあり堂に
一間四方よ過ぎられねゝく朽傾かく骨を頭を畳ぶ檐ふ田文地藏堂と題し
○扁額を掲うこのゝ荘助ふ荒るる小堂ねれども土地ふ由緒ある
霊佛ゆゝ八里遠離る茂林の佛ふ誰ら夜ゆく燈燭を進らば田文と八并作
をきく利益あるめ欲こん近郷の帰依佛ゆんとるへが行婦の名をゆる母の塚さへ
あるゝ悵然とて立ち去らば。彼此をゝんるふ地藏堂の左のゝふ苔埋る

石塔六七あり其間よ近属建ゝんとあば此木塔婆もあるを言訪ゆゆ樹間ふ
草葉よ虫の声るのみ。ゆゝ閑此樹の間より振離瞻れば月ゝ立雲よ又入る月の影
ゆゝ幽け此遠寺の鐘声を空漏さでとそ傳ふ
○後れゝるを急ぐとも甲斐ゆいあゝん且くあふ憩んとそ地藏堂の扉を開て
霎時念して裏面のをつゝくとゑ入るふ石佛ゆゝく坐像と身長八三尺許もある
○前机ゆる一雙の花瓶ふ草の花を建るる日おゝ経よけん茎ゝうそぶ机の中央よ
両皿の盛物あり頭を推鶴して鶴よゝるふ皿ゆる八菜と桃あり時よ取て八色も亦百
味の飲食ありとゝ思へば漫る声を被く地藏尊々々六道能化の教主として餓鬼を
済せゆゝ○餓るもも憐ゝゆゝ御前の供物の好ゝは甚荒ゝを肥さんより己
別當住ん許さゝと戯ゝく進み入り引ゝ寄して菜も桃も漏をとゆく忽地よ盡せ
ふ桃八三四ゝく潰く甘液の多ゝれば飢を志ゝのゝゝ渴ゝゝく止ゝゝ方便無

量の佛恩なると又感じて額をつゐに退けんとすれば孤燈の油も竭て忽地に滅ぬ。あの燈明いとあれかくまれ空はあぢきなく暴雨は降るとも後月の出べくもあらぬ夜に荒芽山までも遇がたし。彼人々は遣んとは今さらあひ決めがたし今宵は暁さへ欲ず彼処までもくべ欲と尋思に胷は安からぬ。古打まれば蚤ぞ口真似欲諸声は鳴立られぬいとぞ〻しく尻もちあるぬ小堂の框に倚そつくづくと猶もく出るを如折〻忽地人の足音して前面より来るあり荘助なるべく遠しとて初夜過るに此の茂林へ松も燈さで獨来るは豈参詣のあれかんや。こは必盗賊の臥竿造ならんぞ。躯れく楚とゑん定めがたしとゑへばやをら〻身を起して竊歩して左邊なる石塔の背に身を潜してその近つくを窺ひうかがふる程に犬山道節忠知君父の讐を報果したる両級の首を腰に著くるもく其処を立退けり。業内知るとのもの。捷徑を疾走りくその夜初更の比及に田文の地蔵の茂林までなりぬ。この堂の邊なる舊塚の間に今茲四月十三日君父の一周忌の追薦に由縁の石建うし塔婆一基あるをれば件の首級を嚮礼んとて茂林の中をぞ進み入る浩処に後方より年老たる賤夫の拷の脚絆に褄端折して竹子笠を戴たる肩かけ袱の小包を結合してもち掛く道節が跡を跟て来つ地蔵堂のあるとある。樹の蔭に立躲れく近くもよりぬ成りそなり道節はるが前後に窺めくありとゑへども塔婆の下に進向つ腰に著る両包の首級の締塊解あらして塔婆の前に賻贈て恭しく額つゐく頻に祈念を凝らもちゐん荘助は塚の蔭より透してゑんぢもて意ぞ肚裏に知りぬ。この癖者が齎して舊塚を祭るは引剥せし贓物を邪鬼に供類して造化を願ふるゑん這奴憎むべし憎むべし先ゐも驚して試てゑんと石塔の間より出して伸して並備へして二包の首級をとゑと攫獲て引入れんとする程に道節はく頭を擡く驚ゐゐ荘助が腕を丁と攬詰て引出さんと

前へ曳く莊助亦引著られ、とゞ俤些も身を動さゞ応は千尋の大木也巨根を四方に張るごとく千曳の綱に被るとも為あるべくもあらぬ道節いよ〳〵驚き怒る引あの程に迭に劣らぬ金剛力士の世尊の鉢を爭ふ紫雲を踏も外せず如く間に両箇の石塔を瓦落離揺と推倒して忽地籠首のあくなりぬれば道節獲うと衝と寄せる股叉に臑を踏入るを左に帯の締塊へ被んと出るを莊助は臀を拈て振釋く雙方入躬の最も抽手相撲の極秘巻法の妙奥互に知るなれが地を踏四あし力足鳥夜に目標は暴雄の勝負孰とも定め難し果は奈末與美の腕に甲乙あるまけりこの時まで彼老人は樹蔭に息を凝らして透し長視く舌を吐ぬその勇力に呆て可も端なくも難うしを恥覚あるものの如く怏るゝ面色して走り寄つて両人が間へ杖を衝入れ推分んと為れば道節も莊助も再びこれに驚ぬく思ひぞ組るを放せ卻舍に落せ首級の包を

両人取らんと立ある処を取らしもやらじ又老人は間に直と躬を入れて杖採為推隔る早速の働ぬ己れも己が肩なる両袱の裹物をうち落しゝ遽しく躬を屈して頻に四下を搖揺る程もひらせば両雄は齊一焦燥立如法夜に認ぬ敵も當坐のゝ覚當るに任して左右より彼老人を突退れば跟蹌めぐり轉も倒れも両三歩退ぬく小勝を突るも下に捞ぬ當しは道節が雙言の首級の二包ぞとぬひらけぬべぐ包よとあるぬるあく引のく左右に抱ぬく身を起もとゝ又ゝ道節は探り當る老人の両箇の包をるが雙言の首級とおゝ人は要時も措ぬ諸に引提く直躬と立てそれらとぞり莊助は且く烏夜に透しく程を揣りく腰力を晃りと拔て丁と砍る寃は前翁くその邉に推倒される石塔の棹石の稜礪と擊つ刀光鋭ぬ巻ぬ冴よその石四五寸打削られて燧と出る石火の光に面を認る程もあく姿を隠せし道節は火を獲く脱る火道の彼に往方もあくびあるを老人は為跡を慕ふく舊来し路へ

走るかん荘助いかゝその足音をそゝのかの癖者あるべしと思ひふければ些も猶豫せず續く
ゝり走りいでゝいづこ茂林を走り行く何処まゝとと投ゝこの荒芽山路へ追蒐しかど曇りし隨ふ霽ぬ宵の六員の
月ハ没ふけんいと暗ゝれがその迹を認ゝ見ゝ只ひとり心あせる彼山の麓村ゝ著ふ
ける不題上野國甘樂郡荒芽山の麓村ふ音音といふ微賤の老女ありけゝ年の齢ハ
五十あまり二三ゝもありぬべし原ハ武藏の人なりしを故ありゝて去歳の夏この山里ふ世を
避ゝより熟ぬゝ枝よ樗食素樸片水の薪樵る鎌倉遠妃不樂僑居かゝて月日を
ふる郷の空ゝ紀三芳野の田面の雁ハまゝ来ゝ秋とゝれが急ゝ冬を御ゝ洗
衣綴刺とゝ鳴虫ふ驚さしゝく今宵より夜延の績苧暇ゝ見現世ゝゝゝ苦ゝを
今ゝ見ゝゝ浮世の中よ老の杖ゝと頼ゝゝ両箇の子共いゝゝる比主の供ゝゝ戦場ふ
赴妃ゝ死せりとも生ゝとも定ゝ信ゝゝ家よ送ゝゝ両箇の媳婦のゝ兄が妻を
曳ゝと名つけ又弟婦を單節と呼ゝり年ハ二十と十八公の松の操よ常葉の竹の子ゝ

産せくるを海内兄妹伏ゐぐゝゐ玉匣をとゝせ近く遠離るとゝもゐ隔ゐ兄相塊の優さゞ劣らゞ姑よ朝夕竭を孝行の徳い孤ゐぐで鄰へいとく遠ゐ山脚の孤屋ゐれば人ゐゞ親族もゐく友も孤く住得ゝ隨の別世界言訪ふゐの八重葎檐端よ暢ふ松風と絶ぬ筧の音いゐれど女子世帯の水入らゞ三人ゐれば姦と訓てゐ文字を我うへゐで背門の秋蝉鳴暮しる七月六日の甲夜過く還らぬ人を俟るゞ門の戸いまゞ鎖ざりゐを有斯く音音い績果ぬ等桶を搔遣り後ゑゝりて喃単節きのふゝりて管領家の戸澤山の狩倉よ斯邉の盡処まで夫役を指れ當月を辛く免れても懇よ售も遣らぬ彼瘦馬のある故よけゐまゞい村長とのく許さゞを一ゐ困ゞ家ゐ男子の絶くゐれば可愛や曳手ゞ今朝未明より馬を追ひて夫よ立く出ゐ隨よ帰るも来ゞ途ゐく荷脱の馬よ逢ゞ継ゝてゐく飯らんとゝひゝゐめをいゐゐゐ白井まゞいも微されゞ趣舎ゐくく丁場まゞ暫

馬よ遂ゐゞも暮て飯らぬゐめいある居ゐ迎ゐく拘てゐをん笛守ゝとゝゞといひゐけく刃を起さんとゐる程よ單節いそく推禁て物体ゐゐゐ宣ふゐ生ゐゐ刃の骨を霸くく天結陰る夜をことゐく親を使ゐく。笛守ゐいせん物の今迄ゐ遅ゐゐゐゐ心ゐかゐ伯れゞ迎よ出ゐゐば阿姑さゐの獨寂く慰ゐゐくゐん拘ゐひを倍人欺とくいゞ苦ゝ紀胄よのを紫ゝ煩ひ待ゐゐ紀胄ハ尚甲夜よ伯ゐる彼茂林の邉ゐゞ走一走邉く迎待ゝん要時の程ゞ俟せゐへと懇よ慰ゐく立ゐくゐを引笛くゐん身を出ゝ遣らんとゝ壁許をゐハゞ紀二人列拉くゐ来る顔ゐゐるゐゞゐいゞゝく又物ゐひを倍んのを彼玄妙寺の鐘の声今撞出ゞ初更ゐゝを早ゐく出く邁遅んゐり且く俟ゞゐゐ来ん今朝も今朝とく

ゐん身と曳ゐゞ夫役よ立を爭ひゐいゐれ邁ん彼ゐゐんとく女子ゐいよゐ相応ゝ

かゝゐ馬追ゐゞも花ゐゐゐいを養ゐ便著と真實ゝ紀心操ハいゞれを妨孰を

妹とる紀くさけれども聿妙ゞひふ爭ひうひく弟八送されあひあ紀その孝行をん
ゆよ就紀ゆよ就く悲し紀い豊嶋煉馬の弟滅亡とひひつ外面透しうんく酸
鼻くる声細やふ言可惜しくあれども受くる恢恩八須弥より高紀吾俤が主君
陪臣でも世ふ知られる道策さあいそめすゞう恥を告ひび情由立ぜ。
うそ紀老の諄言と挾せうる欣ゞうびゞ行れどいと若うしその背彼処へ帰り仕へ
しにあべ紀ゞ欣病内の若黨姥雪世四郎とひふ和郎よあひあひふと膳太くも人
視の関を幾遍欣踰くあふ夜の情の塊を有身しより縛裳覚く郎と共ふ縛め
られ命を呂るべうしふ主君の側室阿是非との其比懐姙ゆあひつと惻隱ある
婦女子れば彼我が為ふゆうし寛やくそゞ仮日ごろ経る隨ふ産ゆひしい男
児ゆく道松と命けくる吾俤ゆ亦いく程ゆく獄舍の中ふ産帯を解しも無
慙や孩ゆくそハカ二郎と尺八ゆりかゆもし程ふ阿是非との願ひゆりて不軌の

科糾しも果び免さしく世四郎ぬしゆそ穏便ふ身の暇をゆうつ吾俤い乳房のく
張れゞそそゞ仮ふ留られて和子の乳母ふゆされうされゞ吾俤が産うし孩い近筆
人許杜鵑子ふ遣らして七才の春まゞ字しゆひゆそ年来道策さゆふ子育ゆり
しふ道松和子の誕生ありしん歡のあまりゆそ喪ゞ紀首を續れく母さへ子さへ
懇ふ庇を賜ひし主の恩いゞう仇ふ送るべ紀とそのと紀ゆひ決めしうゞ子ゆくへ
えもくゞび只和子をのこ学ふの主とし愛く夜と日とゆく字育ゆるせしふ忘れゆるゞ
寛正三年春正月のとゆ紀主君の側室の三の町ゆうし黒白とひひゞ腹ふいゞ来し。
正月とひふる娘さゆふりその母御前の悪心起ゆく正妻ふのゆされし阿是非との
世を去りゆひつ和子も一旦死しゆひを箇様々々のゆゆり和子ハ不思議ふ変り
甦生せゆひく黒白をたゞめ悪人いゞどりゆく亡されく彼娘さゆハ二才ありしを大塚の
荘官許親知らゞとらふ約束ゆて養女ふ取らしゆひふうこの時ゆも神ふ禱を

佛を念して夜昭離執て貳なく仕へる五倍を特に悲しくおぼし食てゑ道策さゑその
次の年の春七歳里に養せしこゞ子共を召すく兄を十條力二郎弟を八郎と名つけ
ゆひ紀十條八女の氏吾倍が親に十條佐吾とて御内の煉馬家をいふ。歩輕卒こけを加以
胞兄弟を道松和子の間侍ひとく手習素讀武藝まで和子と等しく習ひ。
かゝる主君のおん慈愛に譬を取るよ物もなかくく去歳の春の季豊鳴殿
左衛門尉信盛ぞいふ。の歩輕卒赤木市郎ぬの両箇の女児を力二八が嫁ゆとて猛よ縁談
整ふく姻の曳ひを力二よ妻せ妹のそやさ八八八へその婚姻も同宵ゆ時しも四月
十二月世に珍紀妹伏り同庚ゆる主の和子道松さゑまりいちそやく妻を娶らせしも
道策さゑの皆おん指揮の隨ゆ。その歡びい絶よ一宵明るべ修羅の哀こ来
る。夢ひうけゑ紀俄頃の出陣池辰の敗軍に豊嶋煉馬のおん一族負を竭て斃れ
ゑべ誰ろ二人も残ゑ紀吾倍が主君道策さゑおん為が多々の市郎ぬ一まで其処に

命を隕しゑべ煉馬の館さへ火攻せられく家中の男女大さゑゑ紀灰燼とゆりて失
せし時存命ふべくもあらゑ身のゑ紀又ありふすあれば両箇の媳婦を左右よゆて辛く
重圍を脱て些の由縁をあらあてふ。この山里に落住りしは全く命を惜むにあらず。
和子と子共の存亡を拯やく後ゆとともかくもゆくむと豫く覚期を究わし故。
その甲斐ありく教紀和子に信ぜえゑどゑ紀ハ子共のこゝふゑでも音耗
ゑ紀ハ俱に戦歿せしゆあおん妹伏の契りハ絶よ一宵一日も添ぬ良人の面影尚視覚る
遑ぐゑ紀人とてそゆりんは変ぬ操の娣妹ゞ山婦のゑ故に熟るまで吾倍は優し紀
孝親節義をもふよ就くいふひゑ紀ハ舊夫世四郎ぬ一大山の家を去りしより神宮河
原に不樂つも稽平と名を改やく網引を業に只ひとり細紀煙を立槙の潮のまゆく
今もゑ紀恙あゝぶと戸田松の風の便りにゆゝ廿年よ餘る去歳までも絶く歸参の
願ひを立てゞ況や主家の滅亡をあくぞ良しく阿容々々と仇人の民よりゆり果し心ハ鬼狹人に

して人とも思ひ侍らねど縁は絶ても両箇の子共ゞ親てふ文字は削られぜ断ども断まぬ血脈を引べ胞兄弟倶ふ父よ似く命惜しふ思ふ身を伏せて仇人よ降参せるとあば信ぜ

ありくよ思ふまゝ有りとゝへども為片心よかるゝ鶴よ和子よ問まゝせども彼は知ぬ彼ぞ

何事もまゞ告ぬぞ子といふあく絶てなくは親のまゝ思ふぞり長閑ゝんをかゞぬぞふれ

ゝ抱を長生る愚痴は老女の癖ゆを噫並も知ぬ長物語よ夜延の際を費ゝゝり耳苦

しくも聞れぬとゝいひて鼻をうもかゞ単節も涙さゝ吒ゝとふ有ゝ知ぬ物語は皆

教訓の端なふ言ゝとも苟且ようけなゝり侍ゝんや婚姻の宵の侭ふて別れ良人

とゝも世ふ在りとゝ思ひ決め孤ゞ二世の契ゝを憑むゝ胞兄弟倶ふふて仇人よ降参

なるべ知ゝ有ま知ぬ胸苦し知ぬ世四郎さ嘆笑ぐふ阿翁ども、いれ奴義理の

柵ふかゝ歎知を外ふのゝ過ゆふ故をあゝ妹伏の縁は絶ゆとも両箇の子達母

御前共倍二十年あり天山の家ふ仕へくをせゝふ帰参の願ひのゆゝんざりゝはそれも

故を侍りけゝ浮世の中ふ親とて子をゆゝぬふ知ぬゆをと執成せば頭をうも掉りそれ

いふゝるゝ当国も亦角谷家の米地でふ侍れども神宮の郷は豊嶋の舊領他ゝ百姓ハ

とまれかゝまれ彼人ふ阿容々々と仇人の民ふかゝれんや命をを厭ぬ心を推せば故主の恩も

子共のゝもゆゝいる忘れかゝんと腰立げふひ滅せれゝ外面ふ立入響を音音ハ

まゝゆゝつけて彼ハ聞ゆが還りゝ病ん疾燈燭をとふ間ふ単節ハ躭く柄指燭して

先ふ立つ折戸の裡面より妖ゝ為かゝせゆひゝ欠かどゆゝかゝ遅かりゝとゝひうけて

振照らを指燭よ面を對ゝれがそれゆあ

肩中て竹子笠を引提ゝ戸口ふ立て小腰を折め某いこの山脚ある由縁を尋ゝるゆふん

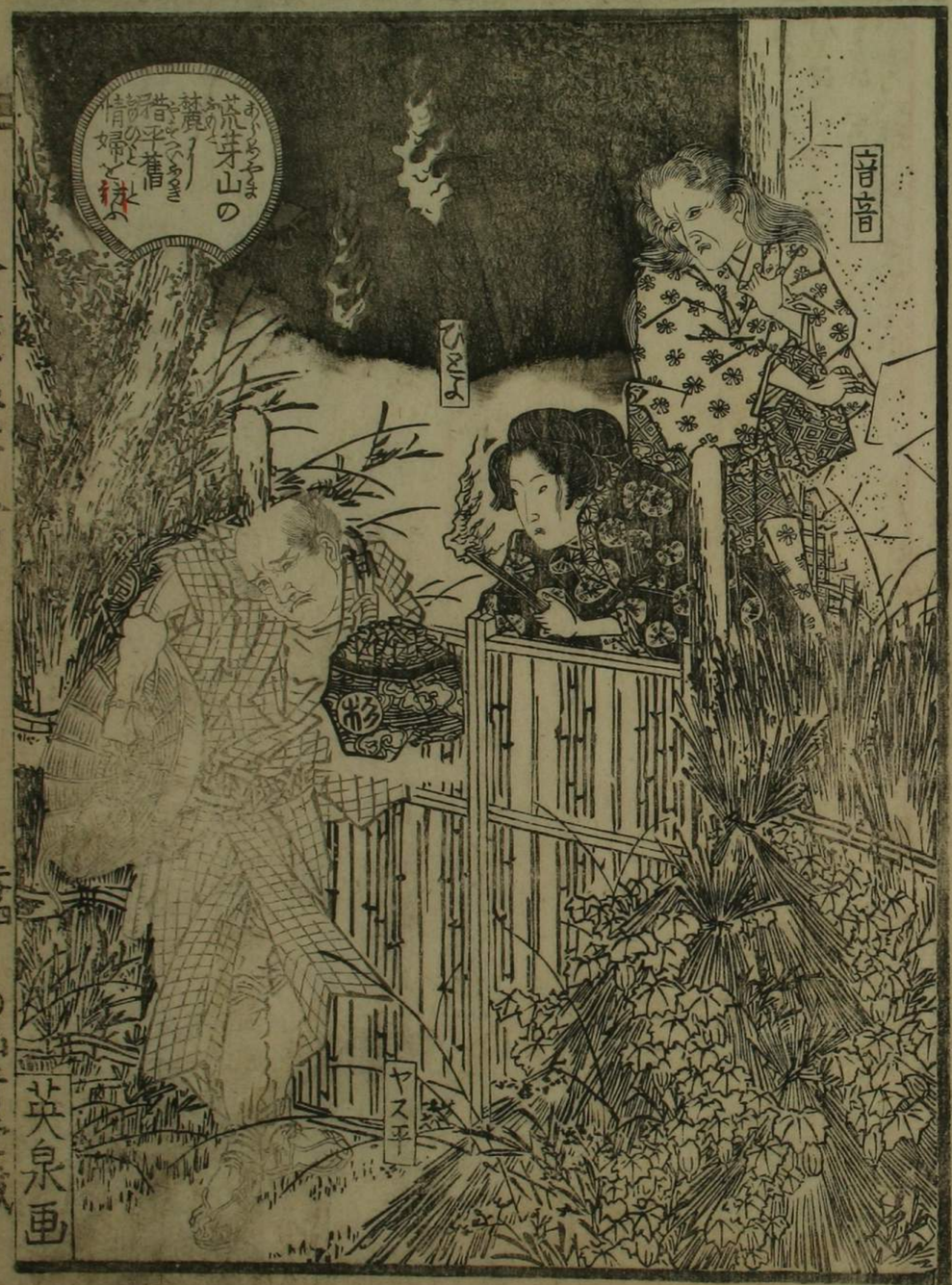
途中て賊ふ追れゝ息煩れて堪ぐゝ水一瓢賜れゝとそれて忽地真覚貌よふ

つゝくとうも視戍るを音音ハいまゞあゝ疲労けゆとくゝ馬を牽

入ゝく足を濯ぎて休ひゆゝとゝひ慰ゆゝく立少く単節が来ゝる指燭の光よゆゝも

○山青堂蔵

亦行客と面を對て鈍まや錯ひふけまと不樂しげ不迭よ再びをんかうんとる行客
ちあく呼みけくとあこい音音ふあくぶあ。これ八世四郎の猪平あり見忘れこ狹いこあ。と
名告るふ扨ととあ驟ぐ宵合ぐ紀諸折戸を裏面あり碓と引蓋こり單節八件の老人が
名告るをやくこの人ありとこひあるる胸苦しふふぐ伏退く姑の袂を竊ふ掖駐て
ちく風彩客あくびを強顔くいあく適しも甘ち彼八平く良人の爹々狄面影忘をあ。
ち心ふ人ぶとも今宵八あくふ獸あるあ甘く武藏のりの今昔を語慰めあ。ぶをとい甘
果ぶ声苛やふふこ八何すをいいこあん心弱ちを女子とあをも浮世の義理ち背かさん
善あをあこあ年あり縁絶こる舊夫八両箇の子共が親ちく親ちぶ分こを故
あく名告も會ぶむこ此不軌ち異あんや世四郎とあ八縁断こり又猪平とい翁ふ訪こ
覚絶こあ壁ぶ認ら風彩客ありとも故主の鴻恩忘ることく忠義ち厚き誠あぶ
今宵八疎いこく歩でも留るよりのあぶ八ふ年あり一日も帰参の勸解をあこ一も。



○山青堂蔵

仇人の民とあるまじき義理を背き一人と知りて何樂くて武藏のもん今昔を思ハ
相譚ぶべ紀ども捨て措ぶ情を被ひそと敦圉卓紀先女の一轍を理とも沈
う〜単節いかに胷苦しさに背向ふ有りて嘆息を猶乎これを洩さく音音ぶ恨
さぞあらんされ豈夫婦の情義をもて阿客々々とて身を訪んや忘れて紀ら敬
まの恩一日も仇ふ有ひども浮世の塵を避しあり漁夫とあり果て又一介の功もか何面
ぐ目を帰参の勸解して子共の身の幅を陝くもべ紀これ亀素ありのまぶ志あるあらう
況心もと紀ハ令郎君のうへあん且又子共のうをも竊ふ報んとあるひて武藏の盡処
うまるくと恥かやうまく詣来らり且くあるを閉てもと敲く折戸の内ふ立つ音音ハ
子共のうへも竊ふ報んといふふ再び胷ハ驚げども思ひ入て回巻も泣く愬もえ
ぬりく扨も単節ぶ涙脆さま今の世の人心親同胞でも油断せ身の仇ふ有る例もあり外ふ立入ハ
敵ぶ紀間諜者ぞあらんぞらんと紀く閉鎖ふ心をつけて門の戸外されやうよ盗ありて紀

咳紀く履音暴く縁頰ある障子を礙と閣隔く母屋へ退紀入りふり単節ハ目
送りつさも氣剛き姑の心の底を汲ねもとあつて紀良人の安否を問ふ事ふ母屋の
うをそ元りあつ遠く指燭を弗と振滅して竊ふ折戸を引閉つ猶乎を透して痛しや
暗夜ふ何時まで立せあるべき阿姑御苛の礼ア言ハ年来大人のもんを思食る誠心ハ
腹ふくアせのひそこの山辺ふ客店ア且く彼処の柴置小屋ふ途の疲労を休ひりく
紀ハ彼を候つく母屋へ伴ひあるもんとふ単節とふれる嫁ぞ侍りと名告あつぞ
涙を袖ふ押拭ハ猶乎ふく歎びて原来そ形さハ豫てゆく尺八が妻単節ありし欤
こゞ年来の志と情由を音音ぶ有るりあれば罵らるとも厭ふ紀ども十年あまり胡越のや
絶く久紀故主へ竭した忠義とのんハ嗚呼あんぞも竊ふ令郎君ふ見参して稟試ぶもとあん
一議ありさぞも又子共ぞ人を母ふも嫁ふも告んとそ有るとも茅ふを空しく還ハ本意
アぞ臥房いかゝ何処あれ一ト宿暁さしあひねといふ単節ハ又うも泣く世とて時とて

物体の良人の多き宿貸あへぬ甲斐なきこと言の葉を縁に繋る誠ぞとかこつも諾ひん心苦しと限りあれど彼処の要時潛せ大きなる土間あれども簀子も些ハ傾き物欲しうもあさび蚊遣の団扇進ぜんその行果の重げなる所にこゝかゝ預けぬ程とあふ隅あれ愛々しさふ猪平ものもく心ちあるく田文の茂林を二箇の包を採違へしとハ思ひもよけぬ。あゝこれを肩よりもをを單節ハ左右に受携て先ハ立ち柴小屋へ案内をしてぞ休ふ二更の鐘の音を聞る當下音音ハ障子をきく單節ハ何処ぞ寝ぬるの鐘の報るふ曳ぬいまぞ〳〵ぞめと問れて單節ハ柴小屋より両三束の續松をとり添く走りぬ。路をまで遇く見えんと回答く母屋へ徳と入りて猪平ゞ両箇の包をそゞ尽戸棚へ隠ゝ草鞋穿締め裙壺打ちつゝく移せ松の火をぬり照してぞ外面へ頻よ走りぬる。

里見八犬傳第五輯巻之四終